

浮氣のすすめ・吉行淳之介



なかつたようだ。
ムードを感じてい
る自分を通して、
後ぐされの予感が
浮んできて、素直
したものとも見え
ない。
私は、スタンダ
君を慰めた。スタ
だ恋いこがれた女
叶う状況になつた
たということだ。
である。

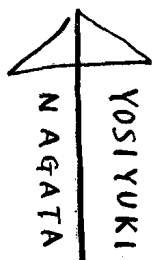
浮気のすすめ

繰り返していうが、いろいろな場合もあるし、
いろいろと調査してみることにしよう。
だいたい「浮気」とは、どういうこ
とかと問われても、私は明快な答を出す
ことができない。明解国語辞典を覗いて
なる。

吉行淳之介

英語の辞引によると、「浮気」に相
当する言葉は三つほどあって、「移りや
すい」という意味の言葉のほか、「淫
奔」という肉のにおいの濃い言葉も混っ
ている。ともかく、世の中には、いろ
いろな人間がいて、いろいろのことをし
ているのである。こゝろで初心をとり戻
た、とスタンダー
し、姿勢を正して、調査し且つかんがえ

浮気のすすめ



一九六〇年二月一八日 印刷
一九六〇年二月二二日 発行

定価 二二〇円

著者 吉行淳之介

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京型七一(九)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁本はお取替え
いたします。

〈検印廃止〉

浮気のすすめ
目次

上半身は参加するか	： 七
ワッハハアについて	： 一三
現代の怪談というもの	： 一六
正常と異常すれすれ	： 二三
代償行為について	： 二九
洞窟の女王たち	： 三五
亭主野郎と女房たち	： 四一
痛しかゆしのこと	： 四六
広く浅く深く狭く	： 五五
今とむかし 男と女	： 六二
千人斬りの英雄たち	： 七〇
女性は楽器であるか	： 七三
瞬間的恋愛について	： 七九
例外か例外でないか	： 八五

恋の保存法について	… 九二
ガーター作戦のこと	… 九七
直球と曲球について	… 一〇三
調味料の使い方	… 一〇九
狐と狸の化かし合い	… 一一五
野菊の鎖について	… 一二三
すりぬけ すりぬけ	… 一二七
自由をわれらに	… 一三三
小道具いろいろ	… 一三九
うらみはふかいぞ	… 一四六
すすめの陰と陽	… 一五三
Z旗を掲げましょう	… 一五九
ここらでひと休み	… 一六五
欲求不満の功罪	… 一七一

雅趣のあるはなし	…一七
つまるかつまらぬか	…一八
風が吹きぬけてゆく	…一九
それを掴むためには	…二〇
フグは喰いたし	…二一
取り上げられた乳房	…二二
本気のぬけがら	…二三

装幀・装画 永田力

浮気のおすすめ

上半身は参加するか

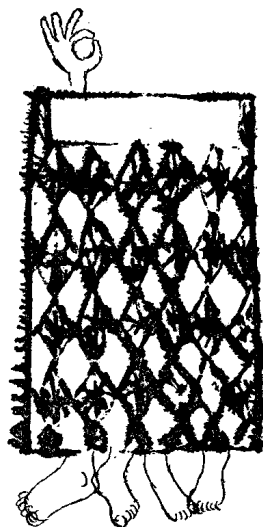
三十台の半ばを過ぎたこのごろ、私は、「恋愛」とか「女性」について、はつきりした意見をもてなくなってきた。なにがなんだか、さっぱり分らない部分も、出てきた。

それらの事柄について、あらためて姿勢を立て直して考えてみようとおもっているとき、たまたまある妙齡の婦人から、次のような質問を受けた。

「やかしていき、どんなにドライぶった人でも、浮気にはロマンチックな要素がなくちゃ、ダメしてしまつたりますの。多少でも精神的なものがなくては。ところで、男の人の場合はどうなへえ？」
浮気 肉体的関係には、ロマンティックなものがぜんぜんなくてもなれるものではないか、聞きかえし。

「おら、フノウく考えた末、答えた。

「ふひるで、ふようふー」



「なれるでしょうね」

すると、彼女は答えた。

「アラ嫌だ」

しかし、私の答えは、男はいついかなる場合にもそうなれる、という意味ではないようだ。そのことに私がはつきり気づいたのは、その翌日、別の女性に次のような質問を受けたときである。

「男というものは、いつでも、浮気することができるもんでしょうか？」

私は、しばらく考えた末、答えた。

「それは、不能の状態になることだってありますよ」

すると、彼女は顔をかがやかせて、

「あら、やっぱり男の人でもそうなのね。女はそれがもつとヒドいのよ。浮気にそれは付きものよ」

というのである。彼女の言葉と、その表情とは著しく食いちがっている。なにも、顔をかがやかせていう言葉ではあるまい。私のそうでなくとも曖昧になっている頭は、ますます混乱してしまった。

「へえ？ 浮気にフノウは付きものなんですか？」

と聞きかえしてみると、彼女は顔をあからめて、

「あら、フノウとおっしゃったの？ わたしには苦悩と聞えたのよ、嫌な人ねえ」

彼女の顔を眺めて、私は考えた。先刻、彼女が顔をかがやかせたのは、浮気において男性も苦悩の状態に陥ることがある、と聞きちがえたからだ。つまり、彼女は浮気にも男性側の上半身が参加することを期待している、ということだ。前の日の女性の質問と、行き着くところは同じなのである。

この二人の女性は、水商売の女性ではないことを、付け加えておくことが必要とおもうが、さらに注目しなくてはならぬことがある。それは、浮気という事柄が彼女自身の問題になっっていることが、この質問の在り方で分るということだ。「浮気」にたいして、彼女たちは野次馬ではないのである。二日つづけてこの種の質問に出会うとは……、と私の頭が「浮気」という事柄に向いた。しかし、このことについても、私の頭には、はっきりした意見は出てこない。

そのとき、彼女の声が聞えてきた。

「でも、不能の状態になるときは、きっと、精神的な要素がない場合でしょう？」

私は考えた。そういう場合もあるし、そうでない場合もあるようだ。私はA君の例を思い出した。

A君は、ある女性をくどいた。二、三度、会っただけの女性である。彼女はA君の好きなタイプの女性で、うかうかすると心臓にムードがからまりついて、厄介なことになりそうな予感があった。後々されがけるのは厭だったので、彼はその気分を払いのけて、わざと露

骨な言葉でくどいた。

「君の恋人（そういうものがあるかどうか）もA君は知らないのだが）は、三分間くらいしか、もたないだろう？」

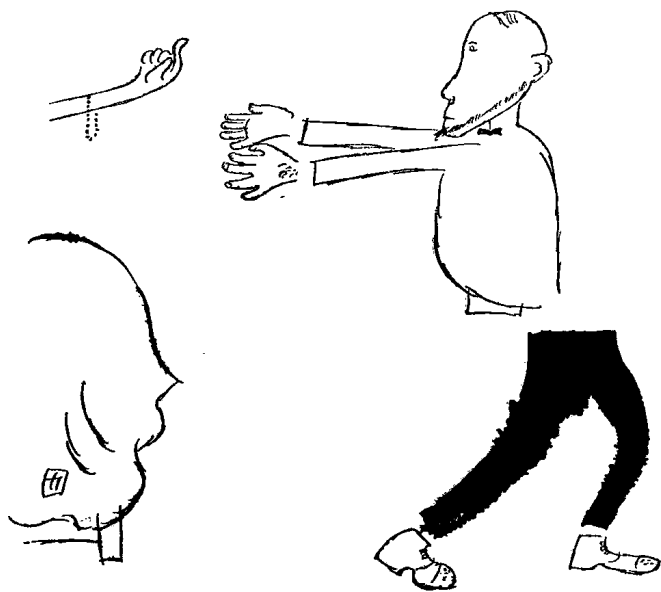
それは、性行為における持続時間を意味している。彼女はちよつと考へて、答へた。

「そうかもしれないわ」

「そんなのは男ではない！ ほんと浮気すれば、ま、一時間くらいはもつてみせる。どうだ君、かるい気持ちためしてみないか」

と、A君は陽気に叫んだ。

露骨で陽気な話題が、彼女を遊蕩的気分には誘ひこんだ様子だった。彼女はバーの女だった、シロウト風の風情を残しており、不身持な女で



はなさそうだ。A君は、彼女に立ち止まって考える暇を与えぬように、その遊蕩氣分を煽り立てた。

そして、とうとう彼女と巡旅館の一室に入ることに成功した。A君はまさかこの夜に成功するとはおもっていなかったたので、有頂天になった。これからの快樂をおもって、胸がドキドキした。

ところが、突然、A君は不能の状態に陥ってしまったのである。酒のせいではない。酒はほとんど飲んでいなかった。疲労もしていなかったし、そうなる予感はずっと無かった。

A君は狼狽した。大言壯語の手前、面目ない心持だ。焦れば焦るほどダメである。彼女が、にわかに甲高いわらい声を立てはじめた。それがトドメを刺した。A君は、完全に不能の状態になってしまったそうである。

A君は、述懐して、私にいった。

「どうも、その女にたいしてムードを感じたのがいけなかったようだ。ムードを感じている自分を通して、後々それの予感が浮んできて、萎縮したものとみえる。ほくは、浮気がしたかったたので、恋愛したかったわけじゃないんだから」

私は、スタンダールの例をあげて、A君を慰めた。スタンダールは、長いあいだ恋いこがれた女性と、ようやく思いが叶う状況になったとき、突然不能に陥ったということだ。感激しすぎたためなのである。

「つまり、上半身に血液が集まりすぎたために、不能になったんだね。文化的な人間ほど、そうなるんだ、とスタンダールはいっているよ。君も、きっと感激すぎたんだろう」

というと、A君はあいまいにうなずいた。

こうなると、精神が参加すると、浮気は成り立たないということになる。そうなれば、浮気というのは、単に下半身の接触を意味していることになる。しかし繰返しているが、そういう場合もあるし、そうでない場合もあるようだ。これから、いろいろと調査してみることしよう。

だいたい、「浮気」とは、どういうことかと問われても、私は明快な答を出すことができない。明解国語辞典を開いてみると、「うわき——外の男（女）に愛情が移る（りやすい）こと」と出ているだけだ。これによって考えれば、いくら移りやすくても、移るのは愛情なのだから、そこには精神が参加していることになる。

英語の字引にたよると、「浮気」に相当する言葉は三つほどあって、「移りやすい」という意味の言葉のほかに、「淫奔」という肉の濃い言葉も混（まじ）っている。ともかく、世の中には、いろいろな人間がいて、いろいろのことをしているのである。こゝらで初心をとり戻し、姿勢を正して、調査し且つかんがえることにしようとおもう。

ワッハハアについて

この随筆は、あまり理詰めな書き方は避けて、なるべく「浮気」

な書き方をしたい。そして、たくさんの断片の積み重ねから、「浮気」というものの姿が浮び上ってくればよい、とおもう。それがどういう姿をしているかは、目下のところ、私自身にとっても曖昧模糊としているのだが。

しかし、あまり散漫になっても困る。前回は、浮気に上半身は参加するか、ということの結論の出ないままで終ったので、そのことについてもう少し書いてみたい。

ある日、B君がこういう話をした。B君が静養のため、ある田舎の宿屋に滞在していたときのことである。その宿屋のまわりには、畠と海があるだけで、静かな土地だ。滞在客は、B君のほかには誰もおらず、ときおり近くの基地のアメリカ兵が女を連れてやってくるだけである。そのときには、閑静な宿屋は旅館と化して、いくぶん賑やかになる。しかし、それもさして耳ざわりにはならず、B君はこの土地の生活が気に入っていた。

余談になるが、その宿屋でB君はマンボウという魚の肉を食べさせてもらった。マンボウ



は、ふつうの魚の頭だけのような格好をした、大きな灰色の魚である。まるい帽子のような形で、背中のはれとおなかのはれが大きく突出している。小さな部屋くらしいの大きさがあ
る。ふだんは暖流のながれている海の底にいて、潮の流れが變つて寒流がながれてきたり
すると、海の上に浮び上つて昼寝している。無精ものなので、漁師の舟が近づいても逃げよ
うとしない。それを漁師が拾つて、目玉に棒を突きとおしてひっぱつてくる。

B君が、マンボウの姿をみたわけではない。話に聞いたのだが、浮世離れしたとほけた魚
の話は、B君のそのときの疲労している心を慰めた。B君が関心を示したので、宿の人が漁
師に手をまわして、マンボウの肉を分けてもらった。その肉は、漁師が奪い合いで食べてし
まうためと、置いておくところとどんどん水になつてしまひ白い纖維だけ残る性質のために、陸の
人間はめつたに口にすることができないのである。

濃い橙色の肝を、白い淡泊な肉でくんで食べると、磯の香がして珍味だった。

そういう生活をしていると、ある日、また、女を連れたアメリカ兵がやつてきた。この一
組は、他の連中とはかなり違つていて、B君の耳をおどろかした。B君は、離れの部屋に引
きこもつていたので、その姿を見たわけではないのだが、その一組の発する大きな声が、い
やでもB君の耳に流れこんでくるのである。

まず、女の声がひびきはじめた。泣くような笑うような声で、それがしだいに高くなつて、
ながながと続く。そこまでは、べつにおどろくことはない。やがて、その声がぶつりと消え
ると、一瞬、静まりかえつた後、男の大きな声が、畠と海に囲まれた小さな宿屋の中にひび